# 滑稽句とペーソス②　小林英昭

つい、長々と引用してしまったが、成美が一茶の句を「貧乏句」だと言うくだりである。無論これは小説である。現実に上記のごとき会話がやりとりされたかは知る由もない。ただ、成美が一茶の句を、信濃の百姓の地声と言っていると表現した、この小説家の洞察力そして表現力は実に見事と言う他はない。

そこで、筆者は思うのだが、一茶の「貧乏句」の内面ににじむこのような哀感、哀愁、悲哀は、一茶の場合、表向きは「滑稽句」として現れるのが常である。いやいや、ここで筆者は、決して、滑稽句＝貧乏句、貧乏句＝滑稽句などと言っているのではない。一茶の句の場合、多くは滑稽とペーソスは常にコインの裏と表の関係に置かれている。と言いたいのである。

そのあたりを踏まえて、他の一茶の句を見てみよう。生涯二万句とも言われる中から文化期（四十二歳～五十五歳）に絞ってわずか、十句を抽出しよう。

木がらしや地びたに暮るる辻諷ひ
春立や四十三年人の飯
炭の火や夜は目につく古畳
むさい家との給ふやうな雛哉
かくれ家や歯のない口で福は内
大の字に寝て涼しさよ淋しさよ
うつくしやせうじの穴の天の川
むまさうな雪がふうはりふわり哉
次の間の灯で飯を喰ふ夜寒哉
蛬（きりぎりす）　尿瓶のおともほそる夜ぞ



滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

一茶は、後年江戸における俳諧での立身出世をあきらめ、ふるさと信濃へ帰って行くのであるが、翁にはまことに失礼な言い様だが、そもそも信濃の片田舎から江戸へ出て俳諧で一旗あげる。そのこと自体がすでに「滑稽」で「ペーソス」をかもしだすに十分なる所業だったのかもしれない。一茶の膨大な句から筆者が勝手に抽出した十句を読むだけでも、そこに、一茶のうしろ姿にまとわりつく、人間一茶の「滑稽」と「ペーソス」の陰影を見る。のである。それは、単に、一茶の句への筆者の思い入れが強すぎる所為だけなのであろうか。

六十五歳、病を得てさへ没するまで持ち続けた俳句への執念とまで言える作句。そこから生まれた句の中から筆者の好きな句を、いますこし引いておこう。

蚤の迹かぞへながらの添乳哉
目出度さもちう位也おらが春
年寄と見るや鳴蚊も耳の際
ともかくもあなた任せのとしの暮
歯ぎしりの拍子とる也きりぎりす
仰のけに落て鳴けり秋の蝉
真直な小便穴や門の雪
ことしから丸儲ぞよ娑婆遊び
隙人や蚊が出た出たと触歩く
飯櫃の螢追い出す夜舟哉



滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。